

魂の還る場所／手這坂再生に込めた山崎さんの思い

谷口吉光（秋田県立大学）

故山崎光博さんは私の大切な友人だった。県立大学短期大学部の元同僚であっただけでなく、家族ぐるみのおつきあいをさせてもらっていたが、残念ながら今年4月22日にガンのため他界された。まだ58歳だった。

山崎さんは生前峰浜村手這坂の再生に意欲を燃やしていた。江戸時代に菅江真澄が「ここに誰世々咲く桃に かくろいて おくゆかしけに 栖（す）めるひと村」と詠んだことから「桃源郷」として知られるこの集落も、2001年山崎さんが初めて行った時には4軒の茅葺き民家が無人のまま荒れるにまかされていた。

しかし、村を訪れた山崎さんの頭には「桃源郷再現」のイメージが浮かんだようだ。すぐに短大の学生と一緒に荒れた民家の修復や草刈りに乗り出す。地元の人と一緒に手這坂活用研究会を立ち上げる。マスコミが取り上げ、大勢の人が手這坂に足を運ぶようになる。こうしてわずか4年で手這坂は秋田で最も注目される地域づくり活動の拠点になった。この先も大きな可能性が開けていたのに、山崎さんは途上で逝ってしまわれた。

山崎さんは手這坂に何を夢見ていたのだろう。短大部の荒樋豊さんは「山崎さんは普通の人々が普通に農村に暮らせることを一番望んでいた」と言っていたから、手這坂にもう一度人が住み、田を耕し、桃の花を咲かせ、つつましくも美しい暮らしを送るようになることを願っていたのかもしれない。山崎さんが再現しようとした桃源郷とは、私たちが近代化と経済的豊かさのなかで見失ってしまった農村の暮らしの価値そのものだったのではないかと思う。

6月4日、桃の花が散った手這坂で「山崎光博教授を偲ぶ会」が開かれ、私も妻や友人と一緒に出席した。東京から奥さんが来られ、東京で闘病生活を送った山崎さんの様子を聞かせてくれた。山崎さんは冬には「手這坂の雪が見たい」、春になると「大潟村の桜が見たい」と言い、最後まで「秋田に行きたい」と語っていたという。茨城で生まれ、東京で暮らしてきた山崎さんがそこまで秋田に、手這坂に思いを込めていたとは。

「山崎の魂は身体を抜け出して、きっと手這坂に還ってきています」との奥さんの言葉に、私たちは改めて周囲の気配をうかがった。茅葺き民家のまわりには小さな蚊がたくさん飛んでいて、私たちの首や耳や顔をかまわず刺した。「この蚊、山崎さんだよ」と誰かが言い、「おれたちを歓迎しているんだ」と別の友人が答えた。みんな笑った。ほろ苦い、でも温かい涙がもう一度私たちのほほを濡らした。

縁あって他所から秋田にやってきて、秋田のために働きたいと思っている人は多いだろう。でも「自分の魂の還る場所はここだ」とまで思えるような強烈な出会いはめったにないだろう。私にもそんな出会いがあるだろうか。山崎さんはその意味で私の人生の道標になった。

偲ぶ会の参加者は桃源郷の再現を願って三色桃の木を10本植えた。秋には峰浜村から70本の桃が寄付されるという。数年後には桃の花が咲き乱れる村の風景が見られるだろう。それを楽しみに私も手這坂に通うことにしよう。